

岩手県大槌町での 支援活動

*** 秋から冬へ ***

大槌町には内陸から海へと大槌川と小釜川の2本の川が注いでいます。毎年11月頃から太平洋を回遊していた鮭が産卵のため遡上しますが、2011年は震災の影響もあり例年と比べその数は少なかったようです。それでも大槌特有の山からの冷たく強い風が吹き始めると、鮭を吊るし干して新巻鮭を作る光景を見ることができました。「南部鼻曲がり鮭」は江戸時代から大槌の特産品なのです。

11月には大槌町漁港で、震災以来途絶えていたセリが再開されました。水揚げ量は微々たるもので小さな小さなセリでしたが、仲買人と漁協職員の姿は勇ましく皆さんの表情からは小さな希望を感じました。

12月には被災した北小学校の校庭に建てられた仮設商店街がオープンし、年末には町内最大の商業施設が再開されました。自家用車の交通量も増え、町内の信号機も復旧が加速しています。こうした町の活気や全体としての雰囲気の良い一方で、移動手段の無い高齢者や単身生活者



子どもクラブのクリスマス会。松ぼっくりでツリーを作った

にとっては、一層の孤独と寂しさをもたらし、強く感じています。日中でも零下となる日が多くなり、東北は厳しい冬へと入りました。

10月に釜石市内の仮設住宅で空いている部屋が支援団体へ貸出され、当会も冬に備えて、それまで居住拠点を置いていた内陸部の遠野市から釜石市へと引っ越しをしました。大槌でも、仮設住宅各戸への暖房器具の配布や県主催の防寒具配布バザーなど、冬支度を整える雰囲気がありました。

当会の活動は当初9月までの予定でしたが、3月までに延長をします。それを喜んでくださった町民の方に「パレスチナさん、秋口で終了なんて言ってたのにさ、秋が短かすぎてわ

かんなかったんだろ？」と冗談を言われたことが印象に残っていますが、その言葉通り残暑なのか秋なのか不安定な天候が続いた秋以降、活動内容もより町民を主体としたものへと変化しました。一時は20名前後いた当会の現地長期スタッフも半数以下となっていますが、地域の活性化とコミュニティの結束を強める事を念頭に、地元の協力を得て活動を継続しています。

* 大槌にも 子どもセンター・児童館を *

各避難所が8月に閉鎖された事をきっかけに避難所での「子どもスペース」や「子どもテント」の活動も一区切りとなり、「放課後子どもクラ



2月に入って、大槌の最高気温は氷点下に

ブ」は仮設小学校から最も近い佐野屋の仮設団地集会所に引越しました。住民のご理解により、平日の14時から18時まで毎日同じ場所を使うことができ、子どもたちが保護者のお迎えを待ちながら楽しく過ごしています。

仮設という一時的な形ではあるものの、住む場所と学びの場所を得て少し落ち着きを取り戻した子どもたちは、避難所生活を強いられていた当時に見られたような乱暴や過度の甘えなどの自己表現は殆ど無くなり、状況の変化に対応しているように見受けられます。もちろん、これから先に子どもたちがそれぞれ直面する厳しい状況を考えると予断は禁物ですが、それでも子どもたちの適応力とエネルギーには日々感銘を受けます。

町内での様々な支援活動を実施していく中で、保護者の皆様から「子どもたちが安全に遊べる環境がほしい」という意見を多数お聞きしました。大槌町や教育委員会へ提案と協議を重ねた結果、町有地を借りて子どもセンター・児童館を建設することになりました。完成は2012年3月を予定しています。学童保育と異なり、年齢や家庭環境に関わらずどの子も自由に遊び場所として利用することができる施設です。また、乳幼児とその保護者を対象とした子育て相談など育児・教育に関わる情報発信、交流の場となることも期待しています。

* 写真の整理と返却展示 *

当会が継続して管理を行っている町内で流された膨大な写真とアルバムの山。延べ数千人を超えるボランティアが携わり整理と清掃を繰り返しながら、定期的に写真返却展を開催し町民の方々にお返しして来ました。これまでに延べ3000人以上が写真やアルバムを手元に取り戻されましたが、依然として多くの写真が残

り、時間の経過と共に腐食や劣化が進んでいます。そこで、1枚でも多くの写真を救うため、写真を複写して画像データとして記録を取りました。大小併せて7000冊超のアルバムと、その他バラ写真の複写が完了しその数約8万ショット。1ショットに1枚～4枚程度の写真が入っていますので20万枚を超える量のデータとなります。これらのデータは1枚ずつにトリミングし、返却展の会場でパソコンを使って写真を検索することが可能となりつつあります。

*** 女性の力 ***

様々な形で地元住民のご協力を得ながら、当会の支援活動は実現できています。現在も写真作業に数名が継続して関わり、「放課後子どもクラブ」では数人のお母さん方が交代で運営に参加しています。また毎週末、町内に点在する48か所の仮設住宅団地を回りながら餅つきやバーベキュー、鮭汁を作りながらの移動型イベントを実施していますが、担当をしているのは被災された地元住民のチームで、被災者自身が同じ被災者の皆さんを励まし盛り上げています。住民の方々と一緒に準備をし調理から片づけまでを行う参加型のイベン

トは、住民から「やっぱり、大勢で食べると美味しいね!」、「身体も心も温まるよ!」と喜んでいただいています。

12月には町内の各地区から数名ずつ、40名程の女性と内陸の遠野市からも数名の女性が駆けつけ、自分たちで考えた特産を使った献立を作るという料理会も行いました。「夫がまだ帰っていないんです。でもこうしてみんなで集まれて嬉しい」と語る女性、自宅も親せきも無事だったけれど「だから皆さんの為に何でもしたいんです」と涙する女性、「力を合わせれば大きな事ができるよ」と力強く語る遠野の女性。一人ずつの自己紹介で、現在の状況や今どこに住んでいるかを発表しながらの豊かな交わりでした。

昨年3月11日の東日本大震災から11か月、来月には1周年を迎えようとしています。希望や不安など、被災された方の思いはそれぞれ違うと思いますが、住民自らが希望と笑顔を増やしていけるような仕組みを考える、私たちはそのサポート役としてお手伝いする、そういう活動にしたいと考えています。そして安全第一に活動を続けています。



具だくさんの肉うどんが大好評